

近世・町修験の基礎的研究

山中 清次

〔抄録〕

近世期の町場（都市）に依拠した修験者の研究は、修験道の全体像を捉える上で不可欠である。本稿では、町場の修験を「町修験」と規定して、彼らの姿を再構成しようとするものである。政治・法制史や宗教史学等の成果を取り入れつつも歴史民俗学的な立場に立ち、修験の置かれた社会状況を考慮に入れて、町修験の生活実態や宗教活動からその特性や背景を追及した。

都市に生きる民間宗教者の一類としての修験は、地方の百姓から転身したものが多く、弟子入りして修験の職分を身につけ渡世した。その住居生活から見ると「地借」「店借」の修験が圧倒的

多数を占める。彼らは市中に雑居し妻帯の家族を持ち、祈祷や卜占の活動の僅かな収入で、下層民と同様のその日暮らしていた。そうした生活を支えたのは祈祷師的渡世である。また、町方の信仰全般に関わり、町民の信仰的な要求に応えられる職分と験力を持っていたことによる。修験が町廻りをして祈願祈祷ができたのは、依頼者による選択自由という「帰依次第」の慣行が認知されていたからである。

キーワード 町修験、店借修験、帰依次第、市中雑居

はじめに

近世期における民間宗教者や芸能者を対象とする研究は、急速に進展してきている。特に被差別民の研究や身分的周縁論の提唱の中で、多くの成果を生み出してきた。近世社会の枠外におかれた修験、神子、

行人、道心、願人、舞太夫、瞽女、座頭などの個別の調査研究により、その組織や活動、社会との関係などが明らかになってきた。^① そのことにより、近世社会がより柔軟な姿として描き出されつつある。

本論で扱う修験道は、早くから民俗学・歴史学をはじめ宗教学や宗教史学・文化人類学をいった諸科学の対象とされて、多くの実績を積

み重ねてきた。この研究者に注目されたのは、修験道が仏教や陰陽道などの影響を受けながらも日本人の宗教として形成されたという点にある。そこに日本人の原初的な信仰や思想が反映されていると考えられてきたからである。

まず、近世期の修験を対象にした先学の研究を振り返っておきたい。宗教史の立場から近世修験道研究の必要性を提言した圭室諦成は、近世修験の特質を現世利益のための祈祷活動と捉えた。それは寺請制の確立と葬式から排除されたことによると指摘した。⁽²⁾

修験道史の研究では、和歌森太郎の『修験道史研究』が今も大きな位置を占めている。その中で古代中世の修験を理想の姿とし、近世期の修験道は幕府権力によって大きく変更を余儀なくされたとした。生活は固定化、類型化され古代中世修験の行動性や神秘性・秘密性・通俗性・多面性は剥奪されたと論じた。こうした近世の修験観は、彼らを対象に発せられた「触」「達」等法令から抽出したものと云える。つまり、幕府法令で規制された「町修験」を通して、近世修験道は通俗化・零落化し、その独自性を失ったとみた。⁽³⁾

民俗学でも柳田國男が修験を「毛坊主」「俗山伏」など下級の民間宗教者として捉え、その存在形態や特質を明らかにすると共に民間信仰に果たした役割を指摘した。⁽⁴⁾ また堀一郎は、漂泊する俗聖を分析対象とし、その一類型に修験系俗聖を設定、修験を遊行的行者と隠遁的行者に分けると共に民間信仰の形成史に位置づけたのである。⁽⁵⁾

この研究の流れを汲み、歴史民俗学の立場から宮本袈裟雄氏は、近世修験道を御師型と里型に類型化し、さらに居住地から農村部の百姓

修験と都市部の町修験に分けた。後者の町修験についても分析対象に加えることを提唱した。さらに店借修験が大勢を占めることから「定着性の希薄」な修験と規定し、中世以来の漂泊の性格を温存させてきたと見た。その特性を個人的で流行神的性格を持つ都市型信仰形態に求め、治病を中心とした個人的な臨時の祈祷が主体であると捉えた。⁽⁶⁾ また、近世後期の江戸市中における修験の関わる災禍を伴う怪異現象や憑霊信仰から庶民の信仰観や修験観をも論及した。⁽⁷⁾

在郷町の修験については、時枝務氏が上野国山田郡大間々町の本山派・大泉院の日記を分析し、その全体像を明らかにした。⁽⁸⁾ さらに町の鎮守社別当として地域社会との関わりも論及し、別当の権威が修験の活動を正当化する上で効果的に作用したと考察した。⁽⁹⁾ これまでの近世修験道の研究は、村落に定住した里修験を対象に、地方での教団組織や地域的展開⁽¹⁰⁾、在地での活動等を論及し多くの成果をあげてきた。幕府の宗教政策との関連から修験の本末関係や教団の組織化を論じた高埜利彦氏の『近世日本の国家権力と宗教』⁽¹¹⁾は近世期の修験を宗教史や政治史的側面から理解する上で重要な文献である。

さて、本稿で扱う町修験とは、江戸府内や地方の城下町・門前町・宿場町・在郷町など「町場に依拠した修験」と規定しておく。具体的には町場で①地借・店借を繰り返す借家住いの一時在所の修験、②町方所有の神社の別当職を勤め、沽券地や社地に家作した家持修験、③本山派や当山派・羽黒派といった修験教団に所属せず俗者で修験道の教えを信じて入峯修行をした「俗修験」⁽¹²⁾、④修験の真似事をした「偽山伏」も含める。つまり町に住んだ末派修験や修験的性格を有し

た下層宗教者と広義に捉えることとした。

先に述べたように幾つかの優れた研究はあるものの町修験について不明な点が多過ぎる。本稿では史料的な制限があるが、人別帳や訴訟文書、江戸町触などを通して、先の①②を中心に町修験の出自、その生活実態など基礎的な事項を明らかにし、幕府権力に規制されながらも町場で生き続けることができた要因は何かを論及したい。さらにそこから、町修験を近世期における民間宗教者としての一存在として捉え直して中世修験の変質や零落した存在ではなく、近世の修験者像を再構成したいということがねらいでもある。

一 町修験の出自と生活

(一) 出自と生国

史料No.1 入置申一札之事⁽¹³⁾

一 私儀病身ニ付農業等陸ヶ敷歳相成兼候間、依之習覚候呪文相唱候処、驗茂有之候間、偏二佛神之氣毒被致、年来修験懇届致候処、今般貴院様弟子ニ相成趣相願候処、早速聞届被成下置候段忝奉存候、然上者一統宗掟為相守可被下候、且又師意ニ不相叶申候節者何時成共、我ら方ニ而引請少茂御苦勞相掛ケ申間敷候 為後証一札仍而如件

文久元年

西五月

野州足利新上町

親類引請人

吉之助(印)

同新上町 當人 文蔵 (印)
川崎村 正年行事 貞瀧坊様 (傍線は筆者が付す)

史料No.1は野州足利新上町の百姓文蔵が「病身ニ付農業等陸ヶ敷歳相成兼候」ということで、同・川崎村本山派正年行事の貞瀧坊の弟子入りを願った一札である。文蔵は、習い覚えた呪文を唱えたところが「験」があったという。病気がちな文蔵は修験の真似ごとをしていたというから偽修験でもあった。このように近世末期であるが、百姓から身分を変えて弟子入りして修験なる事例は稀ではなかった。

文化三(一八〇六)年の史料「百姓其身一代修験之事」⁽¹⁴⁾には、百姓源四郎が病身なので修験になりたいという。百姓株を甥に引受させ、村役人同意のもと一代限り修験道に入ることを認めた。先の文三と同様、病気を理由にして百姓から修験に身分移動したのである。体力を必要とする百姓にとって病身では、過酷な農作業に支障をきたした。そこで祈祷活動などで生きていこうと修験になったとみられる。こうした転身は村役人をはじめ領主の許可が必要であった。さらに同書には、寛政元年作州黒木村の兵四郎が修験になる際、養子を迎えて相続させるが、それが許可されるまでは、田畑とその年貢を親類と五人組に引請けてもらうという記録もある。こうしなければ身分移動は拒否されたのであり、その理由は「田畑不荒様いたし、年貢納方も差し支え不申取計」⁽¹⁵⁾という農村の生産維持であった。

近世後期の農村は、欠落が増え疲弊した。天明六(一七八六)年の「諸国人別改め」と安永九(一七八〇)年の「改」を比べて「諸国に

「 武藏国
 若王子配下 御府内之分
 本山修験道西年人別帳
 若王子触頭
 梅之院 」 (寛政三辛亥年八月)

表 1

No.	生国	住 所	居 住	修験名	歳	備考
1	御当地	霊岸嶋東湊壱町目	家主金右衛門借地	元隆院	81	年行事
2	右同断	同断	元隆院同宅同人附弟	念刀院	21	1の弟子同居
3	御当地	京橋水谷町御菜白魚屋敷	豊倉稲荷別当	大泉院	23	
4	右同断	築地小田原町貳町目	家主儀兵衛店	大徳院	41	
5	右同断	大徳院附弟同宅		祐般房	12	4の弟子同居
6	右同断	参拾間堀四町目	家主弥八店	宝藏院	34	
7	上野館林領	霊岸嶋新地	家主彦兵衛店	護国院	54	
8	御当地	築地南飯田町	喜右衛門店	五宝院	56	
9	右同断	五宝院附弟		般若院	21	8の弟子
10	右同断	同院附弟		泉山房	13	8の弟子
11	越後	北八町堀亀嶋水谷町	家主弥三郎店	理正院	42	
12	右同断	同上	同院隠居	知専院	64	11の親
13	武蔵	八町堀紺屋町	家主文治店	多門院	49	
14	美濃	京橋具足町	家主与左衛門借宅	大学院	55	
15	御当地	中橋大鋸町	家主傳六借宅	福寿院	51	
16	右同断	南八堀貳町目	代地与七店	大善院	56	
17	右同断	同院附弟		右京房	56	16の弟子
18	信濃	霊岸嶋境町	家主久兵衛店	吉祥院	34	
19	御当地	霊岸嶋境町	吉祥院同居	泰龍房	37	18と同居
20	尾張	霊岸町長崎町貳町目	家主忠兵衛店	玉泉房	30	
21	御当地	源川中嶋町	家主文吉店	海宝院	53	
22	記述なし	神田旅籠町壱町目	家主金兵衛借宅	理憲院	25	
23	御当地	神田旅籠町壱町目	家主金兵衛借宅	観音院	53	
24	右同断	本郷貳町目	家主清兵衛店	祐学房	34	
25	右同断	元飯田町中坂下裏町	家主平治郎借宅	福性院	43	
26	遠江	市ヶ谷左門坂	家主清左衛門借宅	常照院	35	
27	御当地	音羽町六町目	家主五郎兵衛借宅	智乗院	40	
28	右同断	中橋桶町壱町目	家主吉兵衛観音院附弟	再興院	42	23の弟子
29	右同断	浅草御蔵前瓦町	家主平六店	覚宝院	52	
30	右同断	神田新シ橋留松町代地	家主喜作店	東性院	28	
31	常陸	浅草田町	家主伊兵衛店	清卜院	69	
32	武蔵	浅草山ノ宿町	家主次右衛門	清朝院	52	
33	摂津	浅草清卜院	附弟同居	清光院	29	No31の弟子
34	駿河	浅草寺地中誠心院地内	家主宗治郎店	行力院	51	
35	出羽	浅草堀田原	家主利八店	清寿院	34	
36	三河	本所小梅代地	七兵衛店	大宝院	75	
37	遠江	同上	右同人附弟同宅	清学院	36	36の弟子・同居
38	御当地	西久保新下谷町	家主伊兵衛店	宝重院	54	
39	右同断	神奈川大日堂留守居役		永守院	記述なし	
40	右同断	牛込筑土下	家主八郎兵衛店	玉蔵院	35	
	越後	八町堀理正院隠居		智泉院		No12と同一人

(東北大学附属図書館所蔵)

て百四十万人減じぬ。この減じたる人、(略)。ただ帳外となり、又は出家・山伏となり、又は無宿となり、又は江戸へ出て人別にも入らずさまよい歩く徒とは成りにける⁽¹⁶⁾と松平定信は嘆く。農村で困窮した者は出家・山伏・無宿人になり、地方の町や江戸に向ったのである。

町修験の出自は、百姓だけでなく医師や神主の俸であった事例もある。医師も帳外の身分とされ呪術的な活動を伴う職種に属し、神主は職分が修験と極めて近い関係にあったので息子たちが修験になることは不思議でなかった。

次に町修験の生国を見てみよう。寛政三(一七九一)年全国的に行われた「生国人別改め」から江戸町居住の本山派梅之院支配下の修験は、約四割が他国出生者であることを高埜利彦氏が既に指摘している⁽¹⁹⁾。同史料を整理したものが表1である。その生国は摂津、駿河、出羽、三河の十二ヶ国に及び、十五人が他国出身であり、全体の三七・五%を占めた。この中には生国ですでに修験者であった者と江戸で師匠の内弟子になる二つのケースが認められる。生国のうち「御当地」も多いが、その来歴を訊ねると初代は他国出身者であり、二代・三代と修験を相続することで定着性を強めたと見られる。

町修験の弟子について表1を見ると、弟子を持っている者が九人⁽²⁰⁾おり、そのうち、弟子と同居しているものが四人もいる。先に述べたように弟子の年齢を見ると、No.5祐般房が十二歳、No.10泉山房が十三歳であり、子供が入門している。対して、師匠の年齢はNo.1元隆院の八十一歳が最高齢である。師匠の平均年齢は四十八歳で、経験豊かな者であった。師匠の家に同居し、寝食を共にしながら修験の職分を習

い覚えさせたのであろう。中には修行中に師匠が病死したので別の師匠に再び弟子入りしたという事例さえあり、未派同行の修験になるために弟子入りは重要な慣行であった。そうした中で、本山への峯入り修行は、修行明けを意味したようで、農村に依拠した里修験同様、本山派や当山派・羽黒派に属して渡世しようとする修験にとって初峯入りは、官位を得ることも一人前の修験になる重要な儀礼であったと考えられる。「江戸町方書上」の中の修験たちは、自らの初峯入り修行について記述していることから理解できよう⁽²²⁾。しかし、峯入修行とそれに伴う官位獲得には多くの費用が必要だったことから見て、貧しい店借の町修験がどれだけ行ったか甚だ疑問である。むしろ師匠の活動を見て習い覚え、「院号」も自ら名乗り祈祷・祈願などの稼業をしたのではないかと推測できる。今のところ町修験の修行や一人前になるための儀礼等については、史料の制約により明らかにできない。

(二) 町場の修験者数と家族

近世後期の天明六(一七八六)年には、江戸町の人數百貳拾万五千三百人、うち山伏は七千貳百三拾人という記録がある⁽²³⁾。これは少し多すぎるようなので、町修験の人數が記されている史料から見ておきたい。

○「南方出家百廿二人之内三人家持、山伏百八拾三人内十三人家持、願人十三人道心者十四人行人五人五口合三百三十七人と有り。」

慶安五年二月町触⁽²⁴⁾

○「南北近辺町々相糾申処、修験者九拾四人御座」 安永七年の町奉行所の調査⁽²⁵⁾

○本山派二十七ヶ院、当山派三十三ヶ院、羽黒派三十四ヶ院、他五ヶ院、計九十九ヶ院

文政八(十一)年の「町方書上」による『御府内備考』に記録された修験⁽²⁶⁾

○「本山派、当山派、羽黒派 一九三ヶ院」

天保十四年「神職修験市中引払」の下地と手当金を支給された者⁽²⁷⁾

(傍線は筆者が付す)

以上のように、各調査の数字に大きな開きがある。各時期による増減とともに「修験」・「山伏」の定義の仕方や「院」と「人」の数え方によるのであろう。天明六年の「七千貳百三拾人」は修験だけでなく、行人・神職・社人・神子・陰陽師といった祈禱系の宗教者及び家族を含めたのではないか。

羽黒派修験は、「羽黒派末寺并修験院跡大數取調帳」によれば延享(一七四四)四七 年間以降、「関東筋散在之分」のうち「一武蔵国御府内分 三百七拾一箇院 内清僧八個院 内神子二軒」とある⁽²⁸⁾。天保十三年の六十一人と大きな開きがある。その「三百七拾一箇院」の中には、活動を停止した「院跡」も含めているからであらう。このように見ると近世中期以降の江戸府内には、少なくとも町修験は二百から三百人が居住していたと推定でき、俗修験を加えるとさらに増えるのではないかと見られる。

地方の町修験は、北関東の城下町・宇都宮の場合、明和六(一七六九)年十一月には、町屋数千貳百貳拾九軒、総人口八千三百五拾四人で、山伏十三人(〇・一六%)がいた⁽²⁹⁾。次に日光街道沿いの城下町・古河の場合、宝暦八(一七五八)七月改「家数人別覚」⁽³⁰⁾には「家数七百九軒、地借貳百九拾四軒・畑屋敷共、二口合千三軒・此借家四百六拾軒 寺院貳拾三ヶ寺、社地六ヶ所、惣竈数千四百貳拾貳竈、僧俗男女都合五千七百七十六人 僧(五十六人)、社人(五人)、医師(十四人)、山伏(廿三人)、神子(十八人)、禪門(貳人)、道心(三十三人) 尼(十五人)、座頭(十一人)、瞽女(三人)、比丘尼(五人)、盲人(三人) 鉦打(五人)と記録されている。

古河町では、総人口五千七百七十六人の中に修験が二十三人(〇・四〇%)いた。宇都宮町に比べて、道心三十三人、神子十八人などと民間宗教者も多く、修験者の人口に占める割合が高い。調査の方法にもよるのであろうが、この数字を宇都宮城下の修験と比べてみると、民間宗教者が集まりやすく、暮らしやすい町だったのかもしれない。何がそうさせたのかは今後追求すべき課題の一つである

里修験の特徴の一つに「妻帯」家族があげられる。妻又は母、娘の添合神子は、在方と較べ町修験には少ない⁽³¹⁾。嘉永三(一八五〇)年「幸手不動院觸頭上申書」⁽³²⁾に江戸市中弘の修験が火災で焼け出された際、一時江戸市中に居ることを願った九軒の家族が記されている。夫婦が一軒、夫婦と子供が三軒、夫婦と親・子供が四軒、修験と子供が一軒であった。これは当時の一般庶民の家族構成と言えよう。ただし、この中に隠居した院号を持つ「父親」が同居している例が一軒あった。

町修験には一代修験が多いが、これは修験を二、三代世代と相続している家族である。先の表1には子供の弟子が二人いた。これは師匠の息子かどうかは不明であるが、先の上申書を例にとれば、「兵庫」「光山」「大学」「承泰」の名があることから息子を後継者にしたのであろうことは容易に推察できる。

(三) 住居事情から見た町修験

町修験の住居状況を見ると、大きく「家持修験」と「家借修験」、「店借修験」の三つタイプに分けられる。さらに「家持修験」は、土地持修験と地借修験の二種類に分類できる。先に示した慶安五（一六五二）年二月三日江戸町触には、「南方出家百廿二人之内三人家持、山伏百八拾三人内十三人家持、願人十三人道心者十四人行人五人五口合三百三十七人」とある。⁽³³⁾この家持は、土地持か地借かは分らない。この町奉行所の調査によれば、当時一八三人の山伏が暮らしていた。そのうち十三人が家持であり、出家や願人・道心者・行人の中では持ち家率が高い。さらに「家持の山伏多きはむかし華美なる粧ひして峯入の供するを名聞として咎られたる者などあり」とある。昔のこととし、家持の末派修験が派手な装いで供奉して評判になり、咎められたというのである。⁽³⁴⁾これを見る限り、近世初期には家持の修験たちが入峯供奉に結袈裟や鈴懸を身に纏い、派手に町を闊歩し修験者としての威厳を示そうとしていたことが理解できる。この家持修験は、町方の神社別当も勤め官位や寺格も高く、檀那場・霞を持って暮らしていたと考えられる。

次に地借の「家持修験」は、地主や町方から借りた土地に家作した。『御府内備考』に記載された地借修験は、十一ヶ院で全体の十一・一%、約一割に過ぎない。この一例として、文政年間頃の浅草田町に住む当山派大徳院について見よう。当時九代目になる大徳院の来歴は、常州出身の修験であった初代が江戸に出たことに始まる。「慶長より元和年中住世仕り、万治元戌年六月命修仕り候。三世大徳院は寛文四年秋、新吉原京町二丁目に転院仕り候。（略）実父大徳院代四十余年ほど前天明年中新吉原水道尻より失火いたし、（略）その節、実父大徳院類焼仕り候ゆえ、浅草田町に住居仕り候」と転居を繰り返した。この土地については「地面の義はもとより御座なく候ゆえ、町地に借地仕り候。総じて土蔵・住居とも坪数四十五坪借仕り候。」と町地を四十五坪借地して住宅と道場である土蔵を建てている。このような歴史と伝統を持つ修験でなければ、地借り家作ができなかったであろう。⁽³⁵⁾

「家借修験」は、先の表1では「借宅」にあたる。同居者を除いた二十九人中、七人が「家借」暮らしをしており、二十四%を占める。対して「店借修験」は『御府内備考』に記載された修験の七五・八%である。当山派修験・泉光院は江戸滞在中の文化十四（一八一七）年、修験の知人を訪ねたところ、「石川と云ふ所に宿替へし居る、由承る、其跡に居る人も山伏の様見えたり、三枚敷の裏家也。江戸中山伏は皆々此様なる住居なり」と記している。「三枚敷の裏家也」とあるように、畳三枚程の粗末な裏店住いであった。これが町修験に限らず当時の下層民の一般的な住まいで、家賃も滞る者も少なくなかった。因みに明和九（一七七二）年の頃、日本橋二丁目の伴家が所持してい

た裏店の規模は四坪以下が九戸、四坪から十坪以下が八戸、十坪以上が一戸、三坪が三戸という零細な住居状況であり、共同施設として井戸一つ、雪隠四つ、小便所が二つ、芥溜一つであった。⁽³⁸⁾

こうした店借修験は、転居を繰り返す「一所不住」が特徴である。転居の理由の一つに火災類焼があるが、その他は、結婚や死亡など家族の増減が考えられるが定かでない。こうした定着性の希薄さは、本来修験が持つとされる斗擲性や行動性から来るのではなく、むしろ近世期の職人の一類として、貧窮の中での祈祷師の渡世稼業がそうさせたと考えられる。

宗教者たる修験が祭祀した「本尊」について『江戸町方書上』を整理すると、火焰を背に岩盤上に立つ不動明王像を所持していることが多い。丈は一尺八寸三分のものから小さいものは三寸七分。それに脇に二童子像。修験によつては本尊を役行者や飯綱権現像とするものもある。⁽³⁹⁾家持修験の場合には、本尊を道場である不動堂に安置して祭祀した。先述した大徳院は、四十五坪の借地内に間口一丈・奥行二間程の土蔵の「不動道場」が作られていた。この中に本尊の不動明王、両童子ほか⁽⁴⁰⁾に大日如来、役行者、理源大師像が厨子に入れられて安置されていた。こうした修験は、代々格式をもち続けた家持修験に限られたとみられる。多くの店借修験は、粗末で狭小な裏店生活から考えて不動明王像と童子像を入れた厨子程度しか安置できなかったのではないか。それは幕府の宗教規制も大きく影響していると考えられる。寛文五（一六六五）年出家・山伏などに対して「一借在家構佛檀、不可求利用事」との法度が出され、その上、修験には「諸旦那より祈念候事申来候節

者、繪像を懸祈念致候、佛檀并木像置候儀者彌無用可致候、尤祈念仕廻候上、繪像など取置可申候」と、さらに後日には「山伏行人願人者、諸旦那より祈念頼候ハ、其時計繪像掛、祈念可仕候、祈念仕廻候ハ、繪像無用可仕事」⁽⁴¹⁾と旦那から依頼があった時だけ繪像をかけてよいが、廻檀する際にも繪像は無用だとされた。こうした触を布達することは、当時町修験たちが、当然の行為として行っていたと推測できる。修験を初めとする民間宗教者に裏店住居や仏壇・木像設置の禁令を何度も出している所を見ると、圭室文雄氏が『日本仏教史・近世』で「祈祷坊主たちの勢力は動ずることはなかった」（一〇八頁）というように、実効性は低かったとみられる。

店借や家借修験は、原則的には道場も寺も構えられず、佛檀さえ持てないということであるから身軽で転居し易いとも言える。そもそも地方の農村から江戸に流入した店借修験たちは、財産など持ちようがなかった。天保年間に寺社奉行が当山派触頭・鳳閣寺に「修験の歸俗と分散」について問合したところ「店借修験之儀ハ、貧窮二迫り候共、雜具之外分散ニ可差出品無之儀と奉存候」と回答していることからも理解できる。こうした貧しい生活は修験に限ったことではないが、修験たちの困窮生活をより強いたのは、「二町中山伏行人之看板并梵天、自今以後、出シ置申間敷事」⁽⁴³⁾と修験の職分を象徴とする看板や梵天の揭示を禁止した点も一因とされよう。

二 町修験の宗教活動

(一) 城下の町修験

北関東・上野国高崎城下の町修験については、『閭里歳時記』⁽⁴⁴⁾からその活動を抜き出してみた。

○正月四日に出家や山伏が年賀のために城内に入り、家老・用人などの家に行き、それから檀家をめぐった。

○正月十日には田町の初市の市神を祭祀した。

○九月二十三日の夜には行人や山伏等が「二十三夜様へ御ほうらい（法楽力）と呼びてあるく」、月待ちをする人々がこれを招くと、門に立って祭文のようなものを長々と読誦し、終わりに勢至の真言を唱えた。

○九月二十四日は南町の愛宕社の祭礼で湯立てをした。また、別当の当山派龍宝寺が同派の修験を集めて、柴燈護摩を修した。

○十二月の晦日正月に飾る白幣を僧・山伏が配ることになっていた。

このように城下町の修験が活躍できたのは、支配者である武士をも祈禱檀那とし、町人の経済活動を守る市神を祭り、庶民の月待ち行事などに関わり、町の鎮守社の別当を兼務して祭礼の神事を司ったというように、町場の各階層の信仰や祭りに関与していたからである。中でも町方の鎮守社別当職を勤めたことが町内での宗教的權威を維持できた点とも考えられる。増してや湯立てや「別当の当山派龍宝寺が同派の修験を集めて、柴燈護摩を修した」ことは、修験の威厳を町民に誇示できる絶好の機会となったはずである。

さらに同国館林城下に住んだ町修験の活動を簡単に述べよう。近世期の館林城下では夏の天王祭が行われた。享保十四（一七二九）年の記録によれば、三ヶ町の神輿渡御に修験二人、供山伏二人と神子一人がついた。神輿の行列は城内に入り神楽をあげ、「幣束新紺屋町修験加納院より検断へ渡し、検断より町御奉行様御請取、城代様江御上被遊、御頂戴以後右幣束御城へ納め申候」⁽⁴⁵⁾とされた。徳川綱吉が城主を務めた時期には、幣束は町修験から町与力衆が受取、町奉行が城に納めた。修験が持った幣束は牛頭天王を象徴し、城及び町を祓い清める役割を持っていたといえる。これから約一世紀後の文政十三（一八三〇）年の町年寄が奉行所に提出した伺書（写）によれば「三社幣束神主より寺社取次江差出於場所城代の者請取之檀江相納候仕来に御座候」⁽⁴⁶⁾とその幣束は神主が扱うようになった。この間の事情は不明だが、修験が城下町全体の祭礼の神事を担っていた時期があったことは確かである。（史料の傍線は筆者付す）

(二) 門前の町修験―檀那寺との出入一件から―

近世期の日光は、家康を東照宮に祀り、將軍や大名・庶民が社参することで門前町として発展した。古代中世の地方霊山の一つとして勢力を誇った日光修験は、近世期には日光山内に居住し清僧としての宗教活動をするだけで、庶民にはほとんど関与しなかった。

ここでは、門前町に住み当山派触頭を勤めた金剛院と檀那寺との争論から、町修験の活動やその確執の背景、その原因を明かにしたい。⁽⁴⁷⁾すでに大瀧晴子氏が日光の里修験について、「宝暦九卯年四月 観音

寺龍藏寺と修験出入二付寺社奉行処より両寺召状之写」文書から日光の里修験の性格と行動について論及したが、ここでは同史料を訴人である金剛院が「町修験」であるという観点で再検討したい。

史料2・1 祈願旦那江相障り候出入⁽⁴⁸⁾

一 拙僧共始日光住居四十ヶ院修験共、古来々数代日光山御神用相努来候而、祈願旦方日光町方其外祈願用努代々相続仕候処、此度同所鉢石町観音寺、御幸町龍藏寺々町方会所江相頼候而、当山派修験之分江祈願一向不相頼様、出合候儀茂差留、剩其段日光山御神領会所杉江太左衛門殿被申渡候十三ヶ条、日待・火防・地祭・遷宮・火卸・釜注連弘・参宮・門注連・疱瘡祭・荒神祭・仁王経・宝開等、先達而右之分祈願指留申候

修験への「祈願依頼禁止」と「出合差止」、修験の「職分十三ヶ条差止」を町内の天台宗の二ヶ寺が町方会所へ頼み、触れ出したことに對する訴えである。三つ禁止の「触」は、町修験の金剛院にとつて、死活にかかわることで許すことができない重大なことに認識し、寺社奉行所へ訴えたのである。

一方観音寺は「十三ヶ条の祈願差止のことを訴えているが、十三ヶ条の内容に限らず、鉢石町分はすべて観音寺の旦那なのだ。町内の檀方に他所から何者にも入り込まないために、檀方に申し渡すように町方に頼んだ。修験が町方に祈願旦那方があると言っているが、私の檀(那)方には、修験の祈願旦那方というものは一軒もない」という。同宗龍藏寺も、「観音寺が自分の檀(那)方には修験の祈願旦那方は一軒

もないというのだから、祈願はできないはずだ。自分の檀那を守るために町役人に頼んだものだ。観音寺は滅罪と祈禱の両方ともやっているのだから、町に修験の入る余地はないはずだ」と答えた。

観音寺は、滅罪寺の旦那場に修験が入れないことを主張した。檀那場に拘る理由はそこから得られる初穂や祈禱料等が、修験・滅罪寺共に重要な収入源であつたに他ならない。寺院が祈願・祈禱まで行うことは、立場の弱い町修験とつて重大な侵略行為と認識したのである。

史料2・2

一 修験共申上候は、日光町方祈願等前々より修験共婦依次第相動来候処ニ、右両寺儀滅罪旦那寺ニ而御座候処、祈願之儀も右両寺々菩提寺之由緒を以向後相務候而は、年来拙僧共相動来候祈願旦那二相離、大勢之者相続仕職分ニ相離難義至極奉存候(傍線筆者)

当時、祈願・祈禱などは、依頼者である信者の「婦依次第」によつていたというのが修験の主張である。これは祈願祈禱の内容によつて、宗教者を自由に選択して依頼できる慣行である。それまで「婦依次第」であつたものが、滅罪旦那寺の権威とその祈禱行為によつて、祈願旦那が奪われてしまうという怖れから訴えを起こした。それは大瀧氏も指摘するように「菩提寺之由緒」つまり、寺請制・寺檀関係における寺院の公的な権威を盾にすることへの不満といえる。

観音寺と龍藏寺は密教系寺院であることもあつて、滅罪に限らず修験と同様な加持祈禱の活動を行っていた。観音寺の返答を見ると、上野・東叡山を持ち出して、自分たちの分限を本寺に認めて貰っている

ということ で説得しようとした。

史料 2・3

一修験共申上候、会所方被申渡候趣ニ御座候得は、町方出合まで一向難相成、日々之営諸事差支難儀至極ニ奉存候

町民への修験との「出合差止」は、町修験の金剛院にとって日々の営み諸事に差支えて「村八分」の状態を意味した。宗教者である修験とは言え、町社会から排除されることは耐え難いことであった。観音寺は「拙僧共曾而存不申候」と否定したが、「出合差止」の背後には、金剛院を町から排除しようという意図があったと、修験・金剛院は、次の訴えをした。

史料 2・4

一修験共申上候、先年従御本寺被仰出候御条目之通、諸国一同当山派一宗引導并宗門請合之義連々相頼候訳を以、去年中より日光御代官所江拙僧共并配下修験之内一同奉願候処、是迄相頼来候諸寺院各々離檀相済、当年宗旨御改方修験之分は一派引導并宗門請合印形差上候筈ニ相済申候、然所二右二ヶ寺茂離檀仕候内ニ而御座候処、今般右離旦仕候訳を遺恨ニ存候哉、右拙僧共祈願之儀ニ相障り、会所江相頼十三ヶ条之祈願急度被相留、修験共年来之檀家ニ相離今日之居統等も難儀仕候、全右之遺恨を以在来候儀を新規二両寺申出候段難心得奉存候、何分此上前々々相務無滞相済来候通無差構町方廻り等茂相成、祈禱ニ不相障候様ニ相手観音寺龍蔵寺被 召出、御吟味之上以 御威光願之通被 仰

付被下置候ハ、難有奉存候

ここが争論の原因を示すところで、修験の「一宗引導」と「宗門請合」から発したものである。享保七（一七二六）年に出された「一宗引導」とは、滅罪寺院が行っていた修験の引導・葬式を修験自身が執行できる一派引導のことで、「宗門請合」も修験自身で人別改による証明ができる条目である。これにより修験は寺院から「離檀」し独立できたのである。この離檀に危機感を持った観音寺などが、その事件を引き起こしたと金剛院は推測し「遺恨」と考えた。

観音寺は、「一宗引導と宗門請合のことは、当年の宗門御改より『離檀』したことの旨、仰せ渡された。拙僧どもが遺恨を持ったように修験は申し上げたが、遺恨に思ったことはない。檀徳への障りの筋があれば関与したが、修験ども勤方の門立之代待・法楽・病家の加持・占八卦坏、又は女房の勤方、数珠占、笹はたき、釜弘等のこと、帰依によつて頼むことに干渉しない。勿論、観音寺の寺中の三ヶ寺がこれらを行えば、鉢石町の（私の）檀方は、祈願を私より割り附けて右の三ヶ寺へやらせる。古来より拙寺ともに四ヶ寺が祈祷なども勤め、相統してきたのだ」と返答。檀方の祈祷は末寺と共に四ヶ寺で祈祷もしてきたと主張した。ただし占考、神下し、湯立て、病の加持などは主として修験・神子が掌管する行為であることは認めた。観音寺には、町内の檀那の滅罪は言うに及ばず、十三ヶ条の祈願祈祷も独占したいという考えがあったように読み取れる。

その後、双方が召出され、①一派引導の「遺恨」の件は双方の申す内容には証拠がない、②祈願且那の件は檀方の寄（考え）次第、③会

所の町触は私的に触を出しもので、あるまじき行為とされた。この③の件は後日関係者が吟味された。最終的には済口証文を書き和談となった。こう見ると、修験側が最も重視した十三ヶ条を含む「祈願」は、従来通りの「帰依次第」となったので修験の勝利といえる。ただし、「出合差止」は無視されてしまったようで、修験の「町廻り」の祈禱が従来通り自由にできることで、この問題は解消されたということであろう。

この争論で浮き彫りになったのは、十三条の祈願祈禱が密教系僧侶と重複するものであったこと、修験が得意とする門立の代待(大事カ)・法楽・病家の加持・占八卦を寺院も認めながらも、修験の「離壇」を契機として、町内の祈願檀家を独占しようとする思惑があったことである。大瀧氏は、この事件を「観音寺が、捲き返し的一端として修験が従来行ってきた祈禱から修験を締め出そうとしてとった行動であった」とした。

近世期東北地方の修験について調査した藤田定興氏は、この「帰依次第」にあたる「檀方思寄次第」について、「檀那の意思によって頼まれれば祈禱するという程度で修験のみの特権として主張できた分野ではなかったらしい。」⁽⁴⁹⁾と、修験にとってそれほど重要ではない権利と推察した。確かに修験の特権ではないかも知れないが、町修験や民間宗教者の渡世の拠所が「帰依次第」や「檀方(願主)思寄次第」ではなかったか。

この史料に記されている日光の町修験の活動を整理すれば、同行と共に日光東照宮の祭りに奉仕する他に、町廻りをしながら日待・火

防・地祭・遷宮・火卸・釜注連払・参宮・門注連・疱瘡祭・荒神祭・仁王経・宝開等の十三ヶ条、さらに門立の代待・法楽・病家の加持・占八卦などを行い、また女房である添合神子が数珠占、笹はたき、釜払を行っていた。こうした職分を行えたのも「帰依次第」の慣行があったからである。寛保元年の『律令要略』にも「祈願檀那は帰依次第なり」とあるように、幕府も認めた慣行だったといえる。

三 市中引払における修験の嘆願と幕府の対応

最後に江戸町修験が最も影響を受けた天保十三・十四年神職修験市中引払の一件における修験の嘆願書を通して町修験の姿を捉えてみたい。

この事業は、老中水野忠邦による天保の改革の一環として位置づけられる。その目的や性格・実施状況などは、近世都市論や宗教史・政治史などから解明されてきた。坂本忠久氏は、この事業の基になった法令成立に関わった寺社奉行・町奉行・町奉行与力の意見を詳細に分析し、「江戸の風俗取締りを目的とした宗教者の身分統制策」⁽⁵⁰⁾との定義づけを試みた。ここでは、近世後期に町住居停止令の対象にされた借家や店借住いの末派修験たちがどのような生活をし、どんな考えを持っていたかの把握に努めたい。

史料3 出家社人町住宅停止并陰陽師普化僧等店借シ方之事⁽⁵¹⁾

一、出家社人山伏修験神職之類ハ町住居令停止候、早々本寺本社又ハ

同宗同派之寺社内江引取可申候

この条文によって、出家・社人・修験・神職たち宗教者が「町住居停止」と、本寺・本社に引き取りが命じられた。外にも江戸市中には神子や願人・神事舞太夫といった民間宗教者がいたが、特に町住居停止の対象になったのは、店借り暮らしで本寺・本社等に引取り可能と考えられた宗教者であった。南氏によれば、幕府の本意は彼らの宗教活動の規制でなく「身分片付」、つまり宗教者の「農民復帰」という⁽⁵²⁾。しかし、現実には不可能なので一箇所に集住させることも考えていたようである。

さて、この市中住居禁止の通達により、教団各派は困惑する中で二・三年の猶予を嘆願した。本山派は、十月に聖護院の使者として江戸氷川の触頭である大乘院が嘆願書を書き、江戸市中に住む触頭たちを連れて、この嘆願書を提出した。⁽⁵³⁾ それ以前にも同行一同が難渋している旨を記し五通の嘆願書を出していた。この内容は次の二点に集約できる。

①妻帯修験の者はそれぞれの住居の最寄りに檀家があり、その施し物で代々暮らしてきた。その檀家から離れてしまうと妻子ともども暮らしていけない。②公武の祈禱の御用も勤めてきた。御府内から立退けば、その檀家から離れてしまひ公武の祈禱の勤めができなくなる。

一方当山派では、九月十二日に三宝院准三宮の使者として触頭の青山・鳳閣寺が嘆願書を書き寺社奉行に提出した。当山派の主張も、本山派と同様で二・三年猶予を願いたいとの趣旨であった。当山派の嘆願は三点に絞られる。

①元来、山伏修験どもは年貢地や町地に雑居してきた。御府内においても夥しい数の修験が住んで居る。その他に京都や大坂、諸国に数多く散在している。御本社へ引取れというけれど、当時醍醐山にはその場所もなく、結果にしているので無理である。②諸宗寺院とは違い、肉食妻帯の輩で、年貢地や町地に雑居して生きていかねば立ち行かない。同派の仲間の輩も一同微力狭小の寺院なので、引き取って助成することは一切できない。③離散に及べば、従来の檀施(家)を離れ、日常の営みに差し迫り廃絶が眼前。多くの眷族の生死にまで及ぶ。

両派とも、町修験は市中雑居に生きる肉食妻帯の半僧半俗の宗教者であること、祈禱檀家の施しものによる不安定な生活で、市中払いされると生活に支障を来し、路頭に迷う修験が多数出るというのである。本山派の主張で特筆すべきは、公武の祈禱を勤めてきたという点である。つまり將軍家や大名家を初めとした武士を檀那として祈禱活動をしてきたというわけである。

こうした嘆願は老中越前守と寺社奉行所の神職・修験に対する救済策に繋がっていったと考えられる。では、幕府の対応はどうであったかを見ておきたい。寺社奉行が老中に出した「神職修験市中住居払之儀二付、取計方御内慮伺書」⁽⁵⁴⁾には、この件に関する調査結果が報告されている。①引払いで差し支えるものが家族を含めて七百人に上る。②彼らは職禄がなく、府内の繁華な土地に居住してきた。修験は竈払い、家祈禱、地清め、不浄払いなどを引き受けていささかの施し物を貰い受け、不安定な生活をしながら妻子を養ってきた。③在方の仲間を引き受ける余裕がない。④数十年来修験の職業で市中に住居してき

た者が、今更俗人に身を変えることも宗法にこだわれない。今後やっていける余業もない。⑤仮に引払を申し論しても路頭に迷う。

特に②は地借・店借修験の活動や生活を適確に把握したといえる。幕府は、市中払いを強行すれば何かと不穩の次第になる恐れがあると憂慮した上で、社地・徐地への相对家作を認めると共に引払い日延べ策がとられた。さらに幕府は熟慮の結果、江戸市中の周縁地・浅草二カ所、渋谷・雑司ヶ谷の四ヶ所に居住地を与え、手当金五千七百兩を支給して修験百九十三人、湯殿行人二人、神職七十六人を移住させた。このような市中払い事業を実施する上で幕府が把握した町修験の生活や活動、そして町修験心意は、近世の町修験の実像に近いものである。

まとめにかえて

町場に依拠した修験を「町修験」と規定して、農村の里修験とは違った有り様を求めた。彼らの出自や生国を見れば、主として地方の百姓からの転身であった。江戸をはじめとする都市に住み付き、修験の師匠に弟子入りし見よう見真似でその職分を覚え、修験渡世を始めた。裏店住まいで妻帯し家族を持ち、最寄りの祈願檀家に対し竈払い・家祈祷・地清め・不浄払い・配礼など行い僅かな施し物を貰い不安定な生活をしてきたというのが一般的な町修験の姿である。

修験が市中で活動出来たのは、城下町高崎で見たように町鎮守の祭祀や町内の各階層の現世利益の信仰に関われたことによる。特に病氣

治癒、防火、商売繁盛をはじめとする種々雑多な都市民の欲求・要望に対応できる職分を持っていたことに加え、修験個人の呪的能力から生み出される「験」が信者の獲得に大きく影響した。また、社会的に認知された「帰依次第」の慣行も大きな支えとなっていたと言える。

町修験の「定着性の希薄さ」は、その多数を占めた店借修験の特質と言える。貧しいながらも「一所不住」の生活ができたのは、支配の不十分さであろう。教団においては本末関係を重視して年行事や触頭を置き同行の人別調べをしたのに対して、町屋に居住した修験に対して、天保期以前には町法も十分に整備されておらず、町方の人別改もルーズであった。そうした中で農村から流入し修験本来の修行もせず、修験の職分を習い覚えただけで祈祷師稼業をしたものが多かった。店借の裏店暮らしの下層修験を生み出した背後には幕府の宗教者規制や都市政策、さらには遊民思想があったと考えられる。

本稿のまとめに当たり、多くの課題を残したことに気づく。町修験を庶民がどのような受け入れどう見ていたか。末派に属さなかった「俗修験」「偽修験」はどのように生きていたかといったことなど未解決である。今後、関係史料を発掘・精査してこれら課題の解決に努めたい。

〔注〕

- (1) 『身分的周縁』部落問題研究所一九九四年 『シリーズ近世の身分的周縁1 民間に生きる宗教者』二〇〇〇年 六月高埜利彦編 他にシリー

ズ2から6 『身分的周縁と近世社会「都市の周縁に生きる」』四吉川弘文館

(2) 圭室諦成「江戸時代山伏の研究序説」『佛教學の諸問題』所収 昭和十年六月 岩波書店

(3) 和歌森太郎『修験道史研究』昭和47年 平凡社 「中世修験道の近世的変質」の章 二九二頁

(4) 『定本柳田国男集』四「山の人生」、同九「妹の力」「巫女考」「一言主考」「毛坊主」

(5) 『我が国民間信仰史の研究』二「宗教史編」 昭和二十七年

(6) 宮本袈裟雄著『里修験の研究』四十五～五十頁 昭和五十九年十月

(7) 右同氏「江戸の怪異現象と風聞」 圭室文雄編『民衆宗京の構造と系譜』所収 雄山閣 平成七年四月

(8) 時枝務「在郷町における里修験の活動」『大間々町誌 別巻六特論編・歴史』平成十二年三月

(9) 時枝務「祭礼と里修験―近世後期における上野国山田郡としての大間々町大泉院の事例―」『山岳修験』第十九号 平成九年十月

(10) 藤田定興『近世修験道の地域的展開』一九九六年九月 日本宗教民俗学叢書3

(11) 高埜利彦『近世日本の国家権力と宗教』一九八九年五月 東京大学出版会

(12) 『俗修験』の項 『修験道辞典』宮家準編 二二二頁 昭和六二年

(13) 小野寺正家(貞瀧坊) 文書「目録」No.二二四

(14) 『徳川禁令考』前集第五 二六五八

(15) 同右書 「修験願之事」六六頁

(16) 松平定信「宇下人言」『日本人の自伝』別巻I所収 平凡社 一九八二年九月

(17) 同右書 文政九年、浅草御掃除領屋敷の羽黒派常明院・顕重は「浅草田原町医師寿碩倅にて二十三才」の時に勝玉院の弟子になった。

(18) 同右書 文政九年 「先代金学院学禪義、市ヶ谷茶之本稻荷神主倅の由承り伝え申し候。」とある

(19) 註(11)「近世国家における家職と權威」

(20) 図表No.1の理正院は隠居1人である、五宝院は弟子二人

(21) 註(18) 羽黒派・常明院は、「勝玉院弟子に相成り、同人病死、その後浅草東仲町金剛院弟子に罷り成り」とある

(22) 羽黒派修験の記録に多い。蓮光院は「寛政3亥年八月朔日出羽国羽黒山において院号職請申し候」 常明院は江戸文化二丑年中羽黒山入峯修行

「十五ヶ年以前実父病死仕り、同年拙僧義羽黒山人峯相勤め、法印に官位昇進仕り候。」「町方書上」「一」浅草(上)、同書「二」浅草(下)、同書「三」下谷・谷中

(23) 大川家文書、宇都宮大学図書館所蔵 目録No.四一、「江戸町方人別 天明六年十月改」、大川家は近世期佐野町居住、彦根藩井伊家の代官を勤

めていた。塚田孝氏によれば、大坂では十七世紀、修験は道心者として扱われ、延宝七年『難波鶴』では、本山七五人当山一六〇人合せて二三

五人いたことが紹介されている。『都市の周縁に生きる』二二〇頁。二〇〇六年十二月。

(24) 「出家山伏願人坊主名前人数調」『嬉遊笑覧』巻十一 二二七頁『日本随筆大成』別巻『嬉遊笑覧』4 昭和五十四年五月

(25) 『江戸町触集成』第七巻 四七五頁

(26) 『御府内備考』

(27) 「寺社奉行書留」「神職修験市中住居引弘之儀二付取計方御内慮伺書」松平伊賀守

(28) 出典『日本大藏経』「修験道章疎」

(29) 「宇都宮町々」『宇都宮史卷之三』上野秀文家文書「宇都宮市史」第四

巻近世史料編Ⅰ 二八三頁 山伏の他に神子二人、道心五人、舞太夫一人、鉦打一人、蛭子一人、座頭六人、盲女二人が記載

(30) 『古河市史 資料近世編』(町方・地方) 昭和五十七年三月 三五四頁

(31) 「武蔵二〇人、上野二六七人、下野一七三人」、西田長男「修験添合神子」

『神道及び神道史』第七号 昭和四三年

(32) 「市中取締類集」十七『大日本近世史料』身分取扱之部 一九八五年

(33) 「出家山伏願人坊主名前人数調」『嬉遊笑覧』卷十一『日本隨筆大成』別巻『嬉遊笑覧』四 昭和五十四年五月、二二七頁

(34) 「六八 覺 一町人召仕之若キ者、さやちりめん羽二重ひらかめや絹袖之外巻物之類、あり帶二も仕間敷事」など奢侈禁止令が出された。『江戸町触集成』第1巻 二三頁

(35) 「江戸町方書上」

(36) 「江戸町方書上」 当山派宝蔵院の場合「五代目宝蔵院清幢儀、宝暦の頃より上野仁王門前町、家主吉兵衛地面内に罷りあり。当時十四坪を借

地仕り残らず家作いたし住居仕り七代相續仕り候」とある

(37) 「日本九峰修行日記」第一巻 日本庶民資料集成 三一書房 ※12

3 乙本「山伏、国元南学院師たる由にて。」

(38) 「江戸住宅事情」都史紀要三十四 東京都公文書館 平成二年五月

(39) 「江戸町方書上」『二』浅草(下)

(40) 右同書

(41) 「徳川禁令考」全集第五 三〇九七 三三〇頁

(42) 右同書 六七頁

(43) 右同書 六七頁

(44) 川野邊寛著 安永九年 谷川健一代表編『日本庶民生活史料集成』第九巻所収 三一書房 一九六九年、坂井康人「近世における勧進の変化と

地域社会―下野国を中心にして―『解放研究』第十九号 二〇〇六年三月

(45) 「館林町暨町・谷越町・足利町牛頭天王祭礼一件」『館林市史』八五二・三頁

(46) 右同書

(47) 「日光の里修験―その性格と行動―宝暦期の鉢石町当山派触頭金剛院を中心に」『日光史談』創刊号 1-5頁 平成二年二月 日光史談

会

(48) 「日光市史」中巻所収 日光市観音寺 所蔵 昭和六十一年三月

(49) 藤田定興『近世修験道の地域的展開』二三六頁

(50) 坂本忠久「近世後期の江戸における宗教者統制と都市問題」『ヒストリア』

(51) 「徳川禁令考」前集第五卷四十八 法制禁令之部

(52) 「幕末江戸社会の研究」一五二頁

(53) 「寺社奉行書留」『東京都神社史料』

(54) 右同書

『その他参考文献』

『日本の近世』七(身分と格式) 中央公論社 一九九二年

『江戸の葬送墓制』都史紀要三十七 平成十一年

『近世における勧進の変化と地域社会』坂井康人 『解放研究』第十九号／

『明日を拓く』第六四号

(やまなか せいじ) 文学研究科日本史学専攻博士後期課程(

(指導…今堀 太逸 教授)

二〇〇七年十月十日受理